

## 特別教育研修講演

## 1. 急がば回れの教育論

西成 活裕\*

教育は国家の根幹であり、社会を形作る基盤となるものである。それゆえに長期的視野で取り組んでいく必要があるが、近年は費用対効果の短期的効率化の名のもとに、残念ながら重要な教育分野での予算が削減されている。すぐに目に見える結果が出ないと「無駄」という烙印が押され、切り捨てられてしまうが、教育への投資は無駄なのだろうか。

私は2008年に「無駄学」(新潮選書)を著し、無駄の判定には「期間設定」が重要であり、その設定した期間の終了時点でのみ無駄かどうか最終的に決めるべきである、ということ述べた。したがって期間途中でマイナスになっていても最後に挽回していればよいのだ。途中で何度も厳しく中間評価をしていると、マイナスを気にして百年の

計のような大きな事業はできなくなってしまい、これが結果的に見て大きな無駄を生んでしまうこともある。この様子を図に表した。

これは縦軸に益、横軸は時間である。実線は短期的に益を狙っていて、結果的に長期的にマイナスになり損をしている状況を表している。ずっとプラスの益になることがもちろんベストだろうが、普通はそのようにうまくいくことばかりではない。それならば、今はマイナスでも我慢し、将来プラスになるような戦略をとった方が長期的視野で成功することもあるのだ。これは点線で描かれているもので、アルファベットのJの文字に似ていることから、Jカーブと呼んでいる。これが出来る人や組織は今やかなり少ないように思える。常に利益追求の評価基準では、このJカーブが生まれ

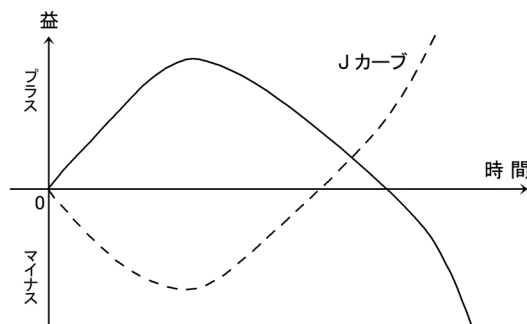


図 Jカーブ

\*東京大学先端科学技術センター 教授 nishijam2@gmail.com

注：本論文は諸般の事情により抄録原稿を掲載した。

る余地は残念ながらほとんどない。

しかしまさに教育とはこのJカーブではないだろうか。いま教えている生徒が20年後に日本を救うほどの大きな活躍をするかもしれないのだ。これは単純な費用対効果では測れない。

そしてJカーブの途中の一時的なマイナスを、私は「科学的ゆとり」と呼んでいる。実現のためにはあえて今マイナスをとる方が有利であり、将来高い確率でプラスになるようにするため、わざと短期的には損に見えるようなことをする、というものが科学的ゆとりである。この重要性は、私

が研究してきた渋滞や混雑という現象からも学んだ。例えば高速道路での車の走行においては、込み始めても前に詰めず、車間距離をあえて空けて40メートル程度に維持して走行した方が、結局通過できる車の量は多くなり、到着時間も短縮につながることを示されたのだ。また製造工場でも、7割程度の稼働率で運転した方が、実は変化の対応の観点から最も良い状態であることも知られている。二宮尊徳の言葉に、遠くをはかるものは富み、近くをはかるものは貧す、とあるのを思い出したい。